月夜とめがね

小川未明

町も、野も、いたるところ、緑の葉につつまれているころでありました。

おだやかな、月のいい晩のことであります。しずかな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただひとり、窓の下にすわって、針しごとをしていました。

ランプの火が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの火に、いくたびも、すかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、ほそい糸をよったりしていました。

月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあたたかな水の中に、木立も、家も、丘も、みんなひたされたようであります。おばあさんは、こうしてしごとをしながら、自分のわかいじぶんのことや、また、遠方のしんせきのことや、はなれてくらしている孫娘のことなどを、空想していたのであります。

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上できざんでいる音がするばかりで、あたりはしんとしずまっていました。ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかな巷の方から、なにか物売りの声や、また、汽車の行く音のような、かすかなとどろきがきこえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのかすら、思いだせないように、ぼんやりとして、ゆめをみるようにおだやかな気持ですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。きっとこれは、風の音だろうと思いました。風は、こうして、あてもなく野原や、町を通るのであります。

すると、こんどは、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもにこにこず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれかよぶのであります。

おばあさんは、さいしょは、自分の耳のせいではないかと思いました。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓をあけてください。」と、また、だれかいいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだろうと思って、立って、窓の戸をあけました。外は、青白い月の光が、あたりをひるまのように、明るく照らしているのであります。

まどの下には、背のあまり高くない男が立って、上をむいていました。男は、黒いめがねをかけて、ひげがありました。

「私はおまえさんを知らないが、だれですか。」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見しらない男の顔を見て、この人はどこか家をまちがえてたずねてきたのではないかと思いました。

「私は、めがね売りです。いろいろなめがねをたくさん持っています。この町へは、はじめてですが、じつに気持のいいきれいな町です。今夜は月がいいから、こうして売って歩くのです。」と、その男はいいました。

おばあさんは、目がかすんで、よく針のめどに、糸が通らないでこまっていたやさきでありましたから、

「私の目にあうような、よく見えるめがねはありますかい。」と、おばあさんはたずねました。
男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきました。そして、その中から、おばあさんにむくようなめがねをよっていましたが、やがて、一つのべっこうぶちの大きなめがねを取り出して、これを、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしました。
「これなら、なんでもよく見えることうけあいです。」と、男はいいました。
窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけてくろずんで咲いて、におっていました。
おばあさんは、このめがねをかけてみました。そして、あちらの目ざまし時計の数字や、暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはっきりとわかるのでした。それは、ちょうど、いく十年前の娘のじぶんには、おそらく、こんなになんでも、はっきりと目にうつったのであろうと、おばあさんに思われたほどです。
おばあさんは、大よろこびでありました。
「あ、これをおくれ。」といって、さっそく、おばあさんは、このめがねを買いました。
おばあさんが、お金をわたすと、黒いめがねをかけた、ひげのあるめがね売りの男は、たち去ってしまいました。男のすがたが見えなくなったときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中ににおっていました。
おばあさんは、窓をしめて、また、もとのところにすわりました。こんどはらくらくと針のめどに糸を通すことができました。おばあさんは、めがねをかけたり、はずしたりしました。ちょうど子どものようにめずらしくて、いろいろにしてみたかったのと、もう一つは、ふだんかけつけないのに、きゅうにめがねをかけて、ようすがかわったからでありました。
おばあさんは、かけていたためがねを、またはずしました。それをたなの上の目ざまし時計のそばにのせて、もう時刻もだいぶおそいからやすもうと、しごとをかたづけにかかりました。
このとき、また外の戸をトン、トンとたたくものがありました。
おばあさんは耳をかたむけました。
「なんというふしぎな晩だろう。また、だれかきたようだ。もう、こんなに……。」と、おばあさんはいって、時計を見ますと、外は月の光に明かるいけれど、時刻はもうだいぶふけていました。
おばあさんは立ちあがって、入り口の方に行きました。小さな手でたたくとみえて、トン、トンというかわいらしい音がしていたのであります。
「こんなにおそくなってから……。」と、おばあさんは口のうちでいいながら戸をあけて見ました。するとそこには、十二三の美しい女の子が目をうるませて立っていました。
「どこの子かしらないが、どうしてこんなにおそくたずねてきました？」と、おばあさんはいぶかりながら問いました。
「私は、町の香水製造場にやとわれています。毎日、毎日、白ばらの花からとった香水をびんにつめています。そして、夜、おそく家に帰ります。今夜も働いて、ひとりぶらぶら月がいいので歩いてきますと、石につまずいて、指をこんなにきずつけてしまいました。私は、いたくて、いたくてがまんができないのです。血が出てとまりません。もう、どの家もみんなねむってしまいました。この家の前を通ると、まだおばあさんが起きておいでなさいます。私は、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いいかただということを知っています。それでつい、戸をたたく気になったのであります。」と、髪の毛の長い、美しい少女はいいました。
おばあさんは、いい香水のにおいが、少女のからだにしみているとみえて、こうして話しているあい

だに、ぷんぷんと鼻にくるのを感じました。
「そんなら、おまえは、私を知っているのですか。」と、おばあさんはたずねました。
「私は、この家の前をこれまでたびたび通って、おばあさんが、窓の下で針しごとをなさっているのを見て知っています。」と、少女は答えました。
「まあ、それはいい子だ。どれ、そのけがをした指を、私に見せなさい。なにか薬をつけてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少女をランプの近くまでつれてきました。少女はかわいらしい指を出して見せました。すると、まっ白な指から赤い血が流れていました。
「あ、かわいそうに、石ですりむいて切ったのだろう。」と、おばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。
「さっきのめがねはどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上をさがしました。めがねは、目ざまし時計のそばにあったので、さっそく、それをかけて、よく少女のきず口を、見てやろうと思いました。
おばあさんは、めがねをかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようとしました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなく、きれいな一つのこちょうでありました。おばあさんは、こんなおだやかな月夜の晩には、よくこちょうが人間にばけて、夜おそくまで起きている家を、たずねることがあるものだという話を思いだしました。そのこちょうは足をいためていたのです。
「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいいました。そして、おばあさんはさきに立って、戸口から出てうらの花園の方へとまわりました。少女はだまって、おばあさんのあとについて行きました。
花園には、いろいろの花が、いまをさかりと咲いていました。ひるまは、そこに、ちょうや、みつばちが集まっていて、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉かげでたのしいゆめをみながらやすんでいるとみえて、まったくしずかでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらのかきねには、白い野ばらの花が、こんもりとかたまって、雪のように咲いています。
「娘はどこへ行った?」と、おばあさんは、ふいに、立ちどまってふりむきました。あとからついてきた少女は、いつのまにか、どこへすがたを消したものか、足音もなく見えなくなってしまいました。
「みんなおやすみ、どれ私もねよう。」と、おばあさんはいって、家の中へはいって行きました。
ほんとうに、いい月夜でした。

底本：「小川未明童話集」新潮文庫、新潮社
1951（昭和26）年11月10日発行
1977（昭和52）年6月10日第40刷
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
1922（大正11）年7月
※初出時の表題は「月夜と眼鏡」です。